

針葉樹會報

復刊第37号
1973年8月



表紙写真説明

尾瀬ヶ原と至仏山

ここは十字路と呼ばれる尾瀬ヶ原の入口である。広い湿原の向うに至仏山がある。湿原をウネウネと続く木の道を歩く人の列をあの山の上から見ると蟻の行列見えるのじやないかな、なんて思う。

ニッコウキスゲのない尾瀬に華やかさはない。枯れた茶色の大きな広がり、そんな感じが強い。あちらこちらの流れの中の水芭蕉、そして黄色のリュウキンカが春を告げるかのように咲いている。

この人出もしばらくの間はおきまり、尾瀬に又静けさが訪れるにちがいない。そして七月、至仏の雪もすっかり消える頃、花とともに人が多勢訪れる。

どうか尾瀬よ、永もちしてその美くしさを保つて欲しい。

(一九七三・五 岡田 健志)

目次

姥湯のこと	豊田 忠巍	1																	
ジーバーホテル	冠木伊右衛門	2																	
四月の御嶽山	柿原 謙一	3																	
浅草岳をあきらめ																			
守門岳へ																			
身辺雑誌 (VIII)	吉沢 一郎	8																	
尾瀬の裏口	岡田 健志	12																	
遠見・唐松	藤原 明信	13																	
お便り紹介	加地 幸雄	14																	
小林茂雄君歓迎山行																			
四八年度総会報告																			
会務報告																			
住所変更																			
針葉樹会会計報告																			
一橋大学山岳部会計報告																			
22	21	20	19	17	16	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

姥湯のこと

豊田忠巍

早いもので私も来年還暦を迎える年になりました。

若い時から山歩きが好きでしたが、体力、財力共に恵まれなかつたため、あまり山へいけなかつたうえ、戦争でなにもかにもダメになりました。

は、もう相当の年になつていきました。

先年勤務先の関係で、東北の山の玄関口ともいえる吾妻、安達太良連峰の中心都市、福

島市に三年近く住む機会を得ましたので暇をみて連峰の山山歩いてみました。

吾妻スカイラインや西吾妻スカイバレーなど山岳自動車道路の開通で、急速に観光地化

し、シーズン中は広大な淨土平もバスや乗用車で一杯になり、近くの吾妻小富士の山腹や火口壁に観光客がむらがあり、山から見おろせば、まるで胡麻をまいたように見えます。

ところが、一歩吾妻連峰の奥へ入れば人影もまばらで、うつそうたる原生林や高山植物の宝庫といわれる大湿原地帯などが残つておきました。早春、浄土平までのバスの開通を待ちかね、旅館は一軒で積雪期は休業）はその景観のすり、結構楽しめる山山です。

斯キーを肩にして信夫高湯温泉経由家形山までの日帰りツアーハイシーズン入りのエベント、バスの開通で蓬萊山の春スキーとなり、火口内にわき出たお湯は川となつて渓谷に流れ、附近には奇岩怪石の類が多く、特に紅葉期の美しさは格別で岩はだの黒、常緑樹の緑、それにまじつた真紅や黄色の紅葉の織成す色彩のシンフォニイは文字どおり息をのむほどく起きて、その日の天候を見定めたうえ山へいけるのは地元の人間の強みです。

最初は二十名の血氣の青年達と行を共にしましたが、彼等は登行途中でバテてしまつた私を待ちくたびれて、こちらがやつとの思いで到着した山頂ですもうをとつて遊んでいることなのです。

それにもうひとつ付け加えたいことは、姥湯の湯治客から聞いた話ですが、旅館で飲用に供している山のわき水のことです。これが無理とわかつたので、以後はもっぱら単独行、精力増進はともかくとして、疲労回復には確かに効果があるようです。

始末、とてもじゃないけれど一緒に歩くのは、私も姥湯を通るたびにためしてみましたが、その代り、自分の体力に合わせて気ままに違ったコースがとれましたので、吾妻、安達太良の山山はほとんど登ることができました。

いうことで、なるべく山では水を飲まないようにしていましたが、姥湯の水を飲んだら、たちまち気分そう快となり、疲れもとれ、そのあと足が大いにはかどった思い出があります。

ただし、水を飲んだらからだを強く動かして血液中に早くとけ込ませる必要があるといわれています。それに季節によつて水の成分に違いがあるのか、あまり効果がないようなときもあるようです。

この水は旅館の北側にある山のごく小さな谷川の水で、屋内には木製のといで引き入れております。

とにかく、一度紅葉の時期に姥湯温泉を訪れ、この「生命の水」をおためしあらんことを。

ジーバーホテル

冠木伊右衛門

ストラ

ランの前にバスは止つたが、他には一軒の家もない。日本では想像もつかない荒涼たる景色だ、ここで食事をすまし、又バスに乗る。やがて山は緑に変り、日本の東北地方でも通る様な景色となつた。右方にはカスピ海がある筈だ。高度計も一〇〇を切つてゐる。カスピ海からの雨雲は、エルブルーズ山脈に障られ、その北面に雨を降らせるが、山脈を越

去年の五月二八日、私は家内と二人で、イラン東部最大の町メシュッドから、六時四〇分発のバスで、テヘランに向つた。イランの北部を東西に走るエルブルーズ山脈の南部を走る筈のバスが、どんどん北に向ひ、その内左側に雪をいたとした山が見えて來た。はて不思議だ、と思つてみると漸く道は西に曲つたが山脈はやはり左側に見える。さてはこの道はエルブルーズ山脈の北側を走るんだなと分つた。まあどうでもいい、テヘランに着けばよいのだから。アフガニスタンとは違つて、九時四十分出発、バスはどんどん山の中に青々とした麦畑が続く高原を走る。車内を見ると、皆イラン人らしく、日本人など我々二人しかいない。十二時近く、一軒の大きなレ

ストラ

ランの前にバスは止つたが、他には一軒の家もない。日本では想像もつかない荒涼たる景色だ、ここで食事をすまし、又バスに乗る。やがて山は緑に変り、日本の東北地方でも通る様な景色となつた。右方にはカスピ海がある筈だ。高度計も一〇〇を切つてゐる。カスピ海からの雨雲は、エルブルーズ山脈に障られ、その北面に雨を降らせるが、山脈を越

したとたん、南面は砂漠の世界に一変する。日も暮れた頃、バスは大きな町に入つた。道路は広く、電灯がつき、近代的な町だ。之がアポールと云う町だつた。八時過ぎ、町を出はずれた処で、大きなレストランの前でバスは止つた。ここで夕食にライスとチキンを注文したら、一羽丸のまゝの鶏をトマトで煮たものを持つて來た。二人で之を食つて三百円だつた。紅茶も四杯も呑んでこの値段だから安い。

入つて行く。高さも忽ち一、一〇〇メートルに上つた。今朝からの長旅ですっかり疲れ、いつの間にか眠つてしまつたが、目が覚めたら、あた

りの景色は一変して、草木一本ない荒々しい岩山になっていた。空には丸な月がこうこうと輝いていたが、今夜は満月だった。今

バスはデマバンドのすぐ東の鞍部を越して居る。標高二、六八〇米の峠だ。いくらのぞいて見てもデマバンドの頂上は見えない。道のすぐそば迄雪が残っていた。満月の夜にデマバンドを越すなんて、山男の冥利につくる。

車はシグザグの道をどんどん下る。もう午前一時だ。遙か彼方に電灯の一面についてる処が見える。多分テヘランだろう。併し走つても走つても近付かない。やっと町中に入つてもバスは走りつけた。やがて真夜中の町角にバスは止まつた。午前二時だ。バスの旅にも慣れたので真夜中におぼり出されても平気になった。一人の男が近附いて来て、ホテルを案内すると云う。その男に連れられて一軒のホテルに入った。昨日の朝からもう廿時間だ、流石に六十七才と六十二才の老夫婦にはこたえた。ベッドに身を投げ出してぐつすり寝てしまった。

七時頃目を覚まし、さてこのホテルは何と

云うホテルかと、フロントでホテルの名刺を貰つたら、その名がシーバーホテル。あまりにもよく出来すぎると一人で苦笑した。

(四八五四)

四月の御嶽山

柿原謙一

山田亮三さんからの便りに「御岳山はぜひぞ、秩父御岳山の主にぜひ木曾の御岳山に登つて頂きたい」とある。秩父御岳には今年になつてすでに二回、通算してみたら十回登つている。本山に登らぬという手はあるまい。併はすでに参加約束をしている。親爺も加わることとした。

次号復刊三十八号は十月末に発行する予定です。夏の山へ行かれる方、初秋の山歩きをされる予定の方原稿をお寄せ下さい。

一、締切日 九月三〇日

二、送り先 ▶100 千代田区丸ノ内一

一三一二 住友化学工業

株東京ボリュチレン部

岡田健志

窓から白雪の御嶽山が見事に眺められた。温泉に着く頃に御嶽山頂はガス。西風が吹きそ

めた。前線は通過中らしい。夜更けて温泉につかる、ときおり三日月が見えた。

八日の早朝快晴の空を仰いで温泉を発つ。仙人滝を眺めて道はやがて濁河川右岸にわたる。七合目への夏路は雪にうもれて判らない。仙人滝を眺めて道はやがて濁河川右岸にわたる。七合目への夏路は雪にうもれて判らない。踏みあとのない原生林をゆくのも時間がかかるだろう。濁河川の谷（草木谷）を直登しても雪崩の心配はなさそうである。直登することとした。踏みあとも少し迷っていた。雪解水がきれいな川底をみせてほとばしっている。しばらく登ると谷は硬い残雪にうづもれており、直登で高度がかせげる。快晴なので太陽光線は容赦なしに照りつけて、踏む雪は真白で美しい。ふりむくと加賀白山が紺碧の空にうかんでいる。滑落のおそれはないが、源流はかなりの急傾斜なのでアイゼンをつけたり休憩したりして直登した。飛驒頂上についたのが十一時をすぎた。温泉をでてから約五時間をおこした。ここから春霞のうえに威容を誇る中央アルプスの連峰や甲斐駒がきれいに眺められた。

摩利支天山へむかう。いよいよ春や雪模漫

歩の醍醐味が楽しめた。登るにつれて穂高・

槍・笠そして乗鞍岳が北方にあらわれる。日本三千米級の山はこれで出そろつたことになる。「こんな天気に恵まれるとは思はざりなる。」と山田君。「快晴かつ無風にて春霞まで」と答える。登りきって休憩する。松本から高山へ通づる野麦峠のあたりに目をむけた。そこはいぜんとしてよく、あの長い道程をと思った。「ああ野麦峠」たシユブルーが右手に鮮かに見える。岩ヒバの感傷が一瞬わたくしの胸にうかんだのである。リガすぐそばまできた。田ノ原着が四時二十分、それより三笠山東北側をまいて原生林く眺められ、下界には春霞がふえてきた。やや西風がではじめた。

白竜小屋のわきで昼食をとる。御嶽の頂は五分、それより三笠山東北側をまいて原生林直登で高度がかせげる。快晴なので太陽光線は容赦なしに照りつけて、踏む雪は真白で美しい。ふりむくと加賀白山が紺碧の空にうかんでいる。滑落のおそれはないが、源流はかなりの急傾斜なのでアイゼンをつけたり休憩したりして直登した。飛驒頂上についたのが十一時をすぎた。温泉をでてから約五時間をおこした。ここから春霞のうえに威容を誇る中央アルプスの連峰や甲斐駒がきれいに眺められた。

摩利支天山へむかう。いよいよ春や雪模漫歩の醍醐味が楽しめた。登るにつれて穂高・槍・笠そして乗鞍岳が北方にあらわれる。日本三千米級の山はこれで出そろつたことになる。「こんな天気に恵まれるとは思はざりなる。」と山田君。「快晴かつ無風にて春霞まで」と答える。登りきって休憩する。松本から高山へ通づる野麦峠のあたりに目をむけた。そこはいぜんとしてよく、あの長い道程をと思った。「ああ野麦峠」たシユブルーが右手に鮮かに見える。岩ヒバの感傷が一瞬わたくしの胸にうかんだのである。リガすぐそばまできた。田ノ原着が四時二十分、それより三笠山東北側をまいて原生林く眺められ、下界には春霞がふえてきた。やや西風がではじめた。

見事に眺めえた。こんなありがたいことはない。ガスの切れ目をみて新管パイプに火を入れる。このパイプの愛称は御嶽さんとすべし、とわたしはつぶやいた。

先までは帰りかねる。八海山荘に一泊することとして、間もなくやつてきたハイヤーに乗りこんだ山田君一行を送った。

翌朝バス停のそばから御嶽がきれいに眺められた。木曽福島駅で地酒「中乗さん」と「七笑」を求めた。木曽福島→塩尻→甲府→高尾→八王子とまことに具合のよろしい鈍行列車に乗りついで帰宅した。木曽路の木の芽の

林、中央線石和一勝沼の桃の花、甲斐駒の勇姿などが、鈍行の車窓からの収穫であつた。家に帰つて夕食前、早速木曽の地酒を呑む。「中乗さん」がやや辛口でおいしかつた。木曽はやはり「中乗さん」である。

(一九七三·四·一五)

浅草岳をあきらめ

守門曲

山本健一郎

度目の山行きという山田さんに、あの予定をきいたところ、三月の浅草岳、四月の御岳など、行つてみたい季節の行つてみたい山があつた。しかし、仕事のやりくりがつきかねて浅草岳にはつき合えず、結果は如何にと数日後に電話をしたところ、五味沢に大雪のためふりこめられ、帰りは川沿いの道を通れず送電線の鉄塔のところのコルをのっこすルートを通り、深いラッセルに音松荘の主人と甘利さんは大奮戦をしたというニュースである。そして四月の声をきいてから、再度出直すがいかないかという電話までいただいて、二つ返事で行きましょうと声をはりあげてしまつた。この山域にある守門岳・浅草岳といふ二つの山のこと教えて下さったのは、村尾さんだつたようと思う。つい分前のことと詳しくおぼえていないが、たのしい春のスキーができる良い山らしいという記憶がある。そして、深田久弥さんの本にも守門岳の話が書いてあつた。それでは一つしらべてみようと本棚をひっかきまわしたものの何もみつからない。三百号まで揃っている「岳人」の束をひつかき廻し二つほど案内をみつけ、地図とてらし合せ読んでみる。地図でびっくりしたのだが、武揚堂へ守門岳ほかの図葉を買いにいったて値上りしているのを発見した。確かに先だつて買ったときには一・三十円だったのが一桁ちがう感じなのである。つい分山へも行かなかつたんだなとあらためて思いかえした次第。

さて、長いスキーをかついでうきうきと、四月二十一日の朝上野の駅でおち合う三人、山田さん、久保さん、小生、それに加えて最いう女性のNさん。一同をのせた列車は順法斗争も一休みとあって順調に清水トンネルをくぐり越後平野へとおりはじめた。このあたり丁度桜が満開とあって、見事ながめをたのしみつつも小生以外の三人はこの前の浅草岳のときとちがい雪がすくなく、ながめが変強烈だつたからだろうと思つたりする。しかし、雪のないゲレンデに残つてゐるリフトの赤い鉄塔を車窓の左右に次々とみせつけられ

るのには、うんざりしてしまう。どうしてこうみつともないものを建てるのだろうか、夏には解体しておくようにした方がよいなど思っているうちに小出到着、すぐ只見線にのりかえ大日川駅へおりたつてまた山田さんは一言雪がなくなつてすっかり様子がちがつてしまつたと感心するのに久保さんNさんもただ同感という様子。

ととりあえずは五味沢音松荘迎えのマイクロバスで宿に入り、山田さんは一杯やりはじめ、久保さんNさん小生は、登路のムジナ沢偵察に出掛ける。今年は雪がすくないらしく、雪が切れており、シールで登るのは面倒そうな情況が続くしムジナ沢の方も沢筋はすっかり雪がなくなつていてるので大変そうである。明日はキーを持って行こうか行くまいか、すこし迷いながら戻ってきた。

翌日は雨、朝早くから音をたてて雨がふり出しどうしようもない。釣竿をかりてイワナ釣に出てみると沢は増水してにぎりも多く、サッパリ釣れない。四阿山と同じく浅草岳も明年にとつておこうやと山田さんはあきらめ

が良い。とにかく雨の中、大白川まで送つて京へ帰る山田さんNさんとわかれ上条といいう守門岳を片づけませんか。俺の知つてゐる鉱泉宿が入広瀬にあるから今日そこへ泊つて、明日はそこから行けるだけいってみようやと、いう久保さん。よし話はきまつたと、五味沢、岳の白い大きい姿、その右手に守門の本峯が音松荘をあとにして大日川へ戻り、雨の中東京へ帰る山田さんNさんとわかれ上条といいうバスで宿に入り、山田さんは一杯やりはじめ、久保さんNさん小生は、登路のムジナ沢偵察へ入つて昼飯をすませても雨は一向止む気配もなく、明日の天気が案じられたが、とおりあえず宿の主人に守門の情況をきいてみると、冬はゲレンデのスキー・バトロールをつとめると、いうご主人は、車で行けるところまで行つてそこから登りました。今年はまだ行つていないので是非一緒にという。タナボタ式にこないでので是れ一緒にという。タナボタ式にころげこんだうまい話に五時出発に約して、八時頃にはねこんでしまつた。

四時半といえどさすがにまだ暗い窓をあけ降雨量の観測用器具をいれた小舎みたいなものあるあたりで柄堀から道院ヒュッテを経てくるルートに合しているこの尾根は巾が広

もらひ帰るといふので、久保さんと相談する。をつんで出発する。破間川の支流西川沿いに浅草岳は雪がすくなく面白くなさそうなので、道は登り二分といふ變つた名の部落をすぎて急な登りで大平といふ台地の上の開拓部落へ出る。この辺はやつと最近電気が入つたそうだ。ここで車を降り浅草岳へ向う。正面に大

のエンジンをかける音がする。正五時スキー

の上をスタスタとばしはじめ。雪がすくなくて木が起き上つてきているのでスキーがときどきひつかかる。保久礼と書いて「ほつきゅうれ」と読む小舎を見おろせる。ピークまではのんびりとした登りであつた。途中降雪、

く、吹雪いたら迷いそうなところである。

小舎のあるコルは、明るい、きれいな、ブナの巨木が一杯生えているとても感じの良いところだった。燃料用の枯枝が雪にぬれぬよう小舎の中においてあつたり、不要な食料をあとの人のために残しておく罐があつたり、

ここを通る人達の心の暖かさが感じられ、北アあたりとはちがう好ましい印象をうけた。

ここからは、急いでしさかこたえる登りが

続いた。雪はびっくりするほど多く、人かけもない。大岳の頂上には釣鐘が一つ、鉄棒につるされて立っていた。

一息いれるとスキーをつけ、急な切れかかつたルンゼをすべりおりる。スキーの大先生はいとも簡単にヒラリといつてしまつたが、グリセードでもおつかないくらいのところ。

途中からは安全第一に横すべりできりぬけるこのあとがまた大変だった。きつい登りのあと小さいピークを一つこえ二つこえ、その三つ目がやっと目指す本峯、五三七米の頂上だつた。北側の切れた谷へはり出した雪庇が大分かけておちているが、その厚みが十米近く

ある。そしてあたり一面の谷から水音にまじ

つてドーン、ドーンと雪の割れる音がひびいてくる。実にのどかな春の山頂の憩いの一時であった。小生にはあまりなじみのない越後ふきのとうをつみながら、春の山を桜の花で草岳だけが馬鹿に身近に感じられる。来年は

はじめた顔をお土産に。

松本駅前に新らしい連絡場所を作りました

松本駅前の松田屋内喫茶室「サンモリック」にはこれまで「連絡ノート」を置き、立寄った時に何かを記入して連絡用に使つたり、想い出を残してきました。が改築工事のため一年近くも「サンモリック」は閉鎖されたままで当分再開の予定がないとのことなので近くにクリスマニヤの孤を続け、ふと立ちどま

り見返した大岳はもうずっと高いところにそびえていた。保久礼小舎上ではじめて二人の登山者に会う。道院ヒュッテから保久礼小舎ありますからせいぜい利用して下さい。

地図を一九ページに書いておきます。

(加藤正巳)

身辺雑記（VIII）

その時（私のその学校への入学の年でもある） ● J・M・ソーリントン（アメリカ）
の第一回目の部員となつた私は今年で五十二年 一八九五年生れ（七八才）
在籍となり、同期生は一人以上いたが、今 ● バウル・バウワー（西ドイツ）
残つてゐるのはたつた三人しかいない。 一八九六年生れ（七七才）

吉沢一郎

歴史とか広く学問の範囲での研究の場合は
別だが、人間、過去のことと愚図々々、モグ
モグ言い出したらもうお終いだということが
よく言われるが、全くその通りだと思う。

私はもうこの十一月で満七〇才になり、私
の人生の半ば以上を可なり越して来た訳にな
るが、私はまだ過去には溺れていたくな
いと思っている。

しかし同年輩あるいはそれ以上の先輩達が

止むを得ないことが次々にこの世から姿を
消していくというのは何としても淋しい限り
であるし、私よりもずっと若い立派な登山家
達が何らかの不注意が基でお先へ失礼とも言
わないで墓の下に潜り込んで行くのにあうと、
私は思わず「この大馬鹿野郎」と鼻水をぬぐ
いながら叫んでしまうことがあるのである。

今の一橋大学の山岳会は一九一一年に出来、
一八九四年生れ（七九才）

日本山岳会の方では一九一五年の入会だから、
あと二年で永年（連続五〇年）会員の資格が
得られることになつてゐるのだが、会員番号
九三〇番の私は一〇〇番以内の生き残り五
〇人前後の一人となつてゐる訳である。

以上前世紀生れ

三田幸夫（日本）

一九〇〇年生れ（七三才）
● アドルフ・ディームベルガー（オーストリー）

ア）一九〇二年生れ（七一才）

今西錦司（日本）

一九〇二年生れ（七一才）

西堀栄三郎（日本）

一九〇三年生れ（七〇才）

以上、一応世界的にも名のある一二人の人

人（彼らの何と頭脳明晰であることよ、そして夫々に各専門分野において頭角を現わして
いる、誠に羨やましい存在である。）は私よ

り半年かそれより年上で、今尚世界の山岳界のために活躍している岳人達であるが、私と同い年あるいは年下でも登山界のために積極的に指導的に立派な勵らきをしている人が沢山いることは言うまでもない。

それは兎に角、皆さんはこの一二の人々の内何人をご存知だろうか。中には日本人の名前でも知らない人がいるのではないかと思う。

私が何故こんなことを言うのかといふと、山登りは登るばかりが能ではないということを言いたかったからに他ならない。

勿論これらの人々のこと全然知らなくとも山登りは出来るし、登山を楽しむことは可能である。それはそれでよいのだが、同じやるなら自分のやつていること、打ち込んでいることの内容を一層豊かにし、幅の広いものにし、深いものにすることが出来たら、ということは考えられないものだろうか。

-9-

そこで私は考えたのだが、一体立派な登山家（山で下らない遭難をしない人を含めて）になるにはどうしたらよいだろうかというこ

ことから、次のような信条といったようなもの立派な登山家とは、「登り、読み、聴き、考え方、書く、」ことの出来る人のことをいうことで、もっと必要な条件はあるかも知れないが、細かくすればきりがないので、五つという手頃な数にとどめた訳である。

ある人はこれを「吉沢語録」といっているが、私としては別に毛沢東さんの真似をした訳ではない。現に私は毛沢東語録という言葉新聞か何かで読んで知っているが、その内容を言いたかったからに他ならない。

そこで、こゝに並べた五つの一つ一つについて考えてみよう。

まず「登る」ということだが、登ることは登山家の第一条件である。確かに登ったこともないのに下手な文句ばかり言っているのは安いが、女性がいた。私は女の鼻をあかすために登つたことはないが、女性に限らず、競争意識をもつて登つておれば同じことである。

右とは少し違うが、あれも行くから俺も行くというのは弥次馬登山である。原則ではな

くといふのは、四角い箱に入つてくることもあるので、注意しなければいけない。

ケープルカー登山は別）山なんかへ登るのだろうか。マロリーは人に聞かれて「山がそこにあるから」と答えたといわれているが、マロリー伝を書いたロバートソン（彼の最初の妻君はマロリーの妹）は、彼がそんなことを

言ふ筈がない。本当は「私は登山家だから」と答えたのだ、と述べている。まあそんなことはどうでもよい。われわれは「好きだから登る」で沢山である。

リーダーの思い違いの犠牲になつた人もある
かと思う。

又、自分の運だめし、力試しの対象として山を選ぶ人もあるうし、他人の手を借りてでも兎に角登つて名声を高め広げるために登る人もあろう。それはいずれも個人の考え方だからお好きなようにとだけ言つておくが、低い山ややさしい山ばかり登つてゐるからといふて決して卑下する必要はないということをこゝでは言つておきたい。どんな山にも謙虚な気持ちで登る人、それが本当の登山家なのである。エベレストへ国家意識や自意識過剰で登つた人より、高尾山へ自力で山を愛しながら登るの方が私は余程立派だと思つてゐる。

今年の春はイタリア隊がエベレストに登つたらしい。だがそのベース・キャンプは帝国ホテル負けな到れりつくせりの豪華版であつたとヒラリーは嘆いていた。ああやんぬるかなである。「登る」ということについてはまだまだ言いたいことは沢山あるが、今回はこの位にして次に移らう。

人のお尻にくつついてばかり登つている人には山の本を読むなんていう余裕は下界にいられないかも知れない。しかし立派な登山家の書いたものは出来るだけ眼を通した方がよい。桑原武夫氏などは私のような下らない人間の書いたものでも読んでいたらしく（本ではなく新聞のコメントだつたかも知れない）、でいるためだろうと思う。皆さんもいつまでどこかの講演の時に私の言つたことを引用したり、たまにではあるが登つたり、歩いたりしておられたというのを知らせてくれた友人がいた。本ともなればどんな下らないものでも、二、三行はいゝことが書いてあるといった人もある。

次に聴くことは殆んど読むことと同じだが、私は桑原氏が監修したモンセルの邦訳を無理に読ませたことがあるが、これなどは立派な本なので二、三行どころか到るところに成程と言わせる箇所があつて、本というものは読むべきものということをつくづく思つたことがある。

とは言うものの私のところへよく初めての人は「日曜はおヒマですか、何時頃お宅へ？」とかいう電話がかかってくることがある。マを縫つて読でいるが、夫々に私の知識欲を満足させてくることが沢山書いてあり、山に直接役立つことにも随分ぶつかつていて、てもないかも知れない。しかし立派な登山家もう私も孫を抱いて陽なたぼっこをしていて、おかしくはない年にはなつてゐるが、身体中のスタミナが衰えないのは、若い岳人とつき合つてることや、本を読んだり、書いたり、たまにではあるが登つたり、歩いたりしておられたということも忘れてはならない。知性の認められた。本ともなればどんな下らないものでも、も元気で山登りがしたいなら、読んで知性を養うことも忘れてはならない。知性の認められない登山行動乃至は活動ほど寂しいものはない。

分の都合だけしか考えられない人が特に若い人に多いが、これは充分考えて欲しいものである。

「考える」という中には反省も含まれる。

この前やった登山はあれでよかつたのだろうか。あの先輩はああ言つたが自分には賛成出来ないとか。いろいろ考えたり反省したりしなければならないことは多いと思う。総じて自分の登山は何のために行なわれているのか。これなどは考えることの最高の問題ではないかと思う。結論は出なくても考る過程が貴重なのである。登山においても重大なのはプロセスであって、頂上は必ずしも問題にする必要はない。プロセスが良ければ登れる場合が多いからである。

それから反省した結果の自分の登山記を書くということは自分にとって必要なばかりか、発表が出来れば人のためにもなる。一応の登山家で自分の登攀記や反省記を書いてない人は殆んどおるまい。

書かなくとも済む。俺は他人のために登山をやっているのではないから、何も書いて発

表する必要は認めない、というならそれでもよい。余計なことを書くよりはじめから書かない方が余程人助けになることもあるからである。

最近他の雑誌にも書いたが、近頃英國では若い登山家の自叙伝がさかんに出ていている。われわれのような特殊なことをやつていて人間にはそういうのも大変参考になるが、

あそこへ登った、こゝへ行つたということだけをとりあげていて、山の世界で自分が精神的にどう成長していったかなどについて何も書いてないのは、自叙伝として落第である、

最後に、美しく死ぬことはやさしいが、美しい老ゆることは難しい、というアンドレ・ジードの言つたという言葉を自分に対する忠告

書いてないのは、自叙伝として落第である、だと思って、毎日を精進していますとご報告。一トバイオグラフィというのは、死にかかる書いてても遅くはないので、書いてあとに遺しておく値打ちがあるものなら、自分でなくとも人が書いて編集してくれる。まあ、

若いうちにそう周章てて出すこともあるまい、

というのが向うの一流登山家達の意見であつたが、私もそう思う。

兎に角、「近頃思ふことは」沢山あっていく

でもご迷惑だろうし、その上、つまらなさがない。余計なことを書くよりはじめから書か一層増すだけのことなのでこの辺で筆をおくことにすると、私は山と山との友達のお蔭によつて今まで生きのびてきた。そしてつく

づくすることは、私の財産は友人である、よき友人をもて、そして自分もよき友人となれ、であり、愚者は己れを賢いと思うが、賢者は己れの愚なることを考える、であり、そして最後に、美しく死ぬことはやさしいが、美しい老ゆることは難しい、というアンドレ・ジードの言つたという言葉を自分に対する忠告

し、やや長くなつた拙文を終ることにする。

尾瀬の裏口

岡田健志

とても信じられない。夢のようだ。先程からそう感じながら三時間程経っている。耳に入れる音といふと、古く大きな木々の間を抜け、只見川の流れの音だけである。その音が大きいかえてくる今は巾も大きく水量も豊富ないだけに余計周囲の静寂さを強調している。

上野発二二時一三分の臨時急行の客は大多數が沼田で降り、待ち受ける数台のバスに乗り込む。大清水に着いたのは二時。寒さに震える登山客の群は夜明けを待ちきれずに懐中電燈の光を先導に動き出す。

雪におおわれた三平峠から木の間越しに見る尾瀬沼は確かに美しく神秘的だし、燧岳の姿も立派だ。尾瀬の自然の美しさはこれ迄多くの人々に讃えられてきたとおりだ。それにしてもこの人出はどうだ。人々……。

これでは尾瀬の自然がどんどん退化してゆくのも仕方がないではないか。山小屋ときたらタタミ一枚に二人の割合で寝なくてはならぬ。食事をするのも行列、便所へ行くのも行列。大湿原を歩くのも二本の丸木半分のレールの上を右側通行厳守のゾロゾロ歩き。高速道路の待避所もどきの個所には夜行列車の疲れが出た人達がゴロ寝をしている。

朝霧が湿原の向うの山裾に湧き昇る早朝恐らく九九%の尾瀬宿泊者がとると思われる富士見峠、鳩待峠、三平峠を経由するルートを避けて銀山湖へ出ることにしたのだつた。

三条の滝へ下る手前でメインルートと別れる銀山湖への道は全く閑散としていた。

とても信じられない。夢のようだ。

薄暗く感ずる位の若葉のトンネルを出たらそこには夏のよう五月の陽光を一杯に受けひつそりと尾瀬口山荘があつた。若葉が陽光に輝やいている。山荘のおかみさんと子供がのどかに話している。尾瀬ヶ原のよりずっと大きな水色焦がきらきら光る水の中に映っている。立派な導標が所在無さそうに立つて今下ってきたその道を案内している。それが全部まるで昼寝をしているみたいだ。そんな景色を見下して逆光の中には燧ヶ岳がそそりたつている。

この程、会費を払いやすくするため、郵便局に口座を設けました。払込者に五〇円の振込料を支払って貰わなければならぬのですが、便りが書ける通信欄もあり便利です。振込先は

東京一八三四五八 針葉樹会

です。ご利用下さい。

遠見・唐松

が出来た。

四月三〇日

交通ゼネストで混乱していた東京を離れ、

初めてみる鹿島槍にむかってさかんにシャツ
ターをきつていて。

藤原朋信

神城駅に着いたのは朝七時。登山計画書に記入するとすぐ歩きはじめた。

もう歩く気がしなくなつた僕とMはまだ日
は高いのにツェルトをかぶつた。

五月に一度鹿島槍を眺めてみたい（決して
登りたいというわけではない）という思いが
会社に入つてから年々強くなり、昨今では強
迫観念めいたものになつて私の心をしめつけ
ていた。（それは五年前の五月一日に鹿島槍

空は五月晴れである。スキー場をすぎて途
中から冬道に入った。冬の間のスキー場のに
ぎやかさはない。先に行く二人パーティーを
目標に快調に登ること二時間半で遠見小屋に
着いた。

天狗尾根で遭難したNに対する借りに似た感
情であったかもしれない。）

そういうわけで今年は早くから連休山行は
鹿島槍だと心に決めていたのであるが、いざ
連休が近づくにつれてなにやかやと浮世のし
がらみがまとわりついて、それから脱出する

のが困難に思われてきた。一人ではそのまま
心の弱さに負けてしまう恐れで必死に同行者
を求めたところ、幸い会社の山岳部のリーダ
ーをやってもらっているM君が同行したいと
いうのでようやくにして計画をまとめること

新入会員紹介

のあたりにくると風が強い。天気予報だと明
日は気圧の谷が通過することになつていて。

紹介します。

天気の良いうちに早く鹿島槍を見たいとい

う気持にせかされ、どんどんピッチをあげた。

午前一一時、登りはじめて四時間でついに鹿

島槍がその姿をあらわした。カクネ里よりま
上田伸（自）▽165 東京都中野区野方三一

一四一二一 日鉱野方寮 TEL

つすぐ空に突き上げた残雪の鹿島槍はいつ見

三八五一三九一

（勤）▽107 港区赤坂葵町三

僕は三月、四月と大糸線の車中から遠く眺

日本鉱業株金属加工営業部 TEL

五八二一二一一

マネージャー 加藤博行 (社二)

藤巻 悟 (自) ▼171 豊島区雑司ヶ谷三一

大枝 実 (社二)

れた。当会では初めてのこと。おめでとうございます。

一九一一三 東亜燃料雑司ヶ谷寮 T

△吉沢一郎氏ご結婚

E L 九八二一ニ五七八

五月二八日原田貴美子とご結婚。甘利

(勤) 千代田区神田一ツ橋一
一一一 パレスサイドビル 東亜燃

仁朗氏、中島寛氏が発起人となり若手

料㈱企画室企画第二課 T E L 二一

有志が集まつて六本木でお祝いをした。

三一二二一一

この四月次の新入部員が生れました。紹介
します。会社へ遊びに来ましたら面倒をみて

井草長雄 (自) ▼ 国立市北一一一 下さい。

一 関方

尚、西田研志君は法学部在学中で今年は卒業を見送りました。

佐藤活郎 社会学部 神奈川県平沼高

校出身

松田重明 社会学部 都立西高出身

お便り紹介

若林貴之 社会学部 福岡県修猷館高

校出身

※※※※※※※※

加地幸雄氏からお便りをいただきま

した。氏は昭和三十三年卒業。私が

一年部員だった昭和三十八年当時す

でにアメリカに居られたと思うから

随分永く外地生活を送つておられる

ことになる。現在彼地のユタ大学で

哲学を教えておられます。哲学とい

うだけでも難解な印象を受けるのに、

それを英語で考え又教えるというこ

リーダー 前神直樹 (社三)

藤本敏行 (経三)

△山田亮三氏札幌へ

装備 藤田一成 (法二)

記録 増井誠 (商二)

記録 兵藤元史 (経二)

図書 元井慎一 (商二)

春の定例叙勲で勲三等瑞宝賞を受けら

とは私なんかに云わせれば気違ひ沙汰だと思います。手紙から見ますと至極優雅に、お元気にご活躍されてるようです。

(編集係)

僕の筆不精にもかかわらず、会報を送つて下さりありがとうございます。七二年度九月号と一二月号がカナダをまわって来、なつかしく読みました。僕の住所はこの便箋にあるように変えて下さい。

石君がミシガンに滞在のこと、もう少し早くわかつたらユタに来てもらえたかも知れぬと残念です。今日頃欧洲へたつてしまふことでしょう。又九月号で佐薙さんがテキサスにおられると知り、早速山スキーにユタに来て下さいと書いた所、仕事が忙がしくて山どころではないけれどテキサスに来たら自慢のステーキをおごってやるとの返事でした。(ついでながら此週は肉は買わないことにしようと主婦連盟などがさかんに云っています。さかんです。同封のパンフレットに"GRAD-

高価すぎるるのでボイコットというわけです。) UATE STAFF" とあるのは大学院の哲学

ユタは山、雪質、雪量みな良く山スキーと程の山スキー行、顔が雪やけで真黒です。で、梅池から白馬あるいは河童橋から前穂へ行くようなものです。この冬はこれで三〇回程の山スキー行、争の世ですから悪いこともあります。僕は日本と違つて多数の教授が同じ大学の出身でユタ州はモンタナ、アイダホ、コロラド、ワイオミング等と並んでロッキー山脈の州で八千から一万三千尺以上の山々が数えきれぬ程です。同封の写真はロッキー山脈の中のW-

A S A T C H 連山で僕の家はその裾野にあります。一橋山岳部がユタ大学にあつたら部員はきっと教室に顔を出さないことでしょう。

米国の山は何とくつてもロッキーですが、州の面積は日本の本州と同じ位、人口は一五〇万人程と思います。雨量が日本の一割か二割程なので州の半分以上が砂漠です。主都の SALT LAKE 市はばかげた宗教、モルモン教の中心地で哲学部にとつては逆境ですが、

それでも他のアメリカの大学のように哲学は高価すぎるのでボイコットというわけです。) UATE STAFF" とあるのは大学院の哲学

教授団の意味です。人の名の後ににある学校名などれの天国です。毎週かかさず一万一千尺は博士号を授与した大学、それに専攻分野が級の山々へ行きます。そういうと大登山のようですが、実は我家のある所が五千尺近いのはプリンストン大学で博士号を授与され専攻は古代哲学、形而上学のご様子です。一)

チア山脈は山脈というより山群のくさりのよ

いので（五日程）耐久力は必要です。

うなものです。そのくさりの北部（ニューハイ

て来られたのを機会に、さゝやかな懇現山行を試みました。

ンブシャー州)にあるWHITE MTSは丁度
秩父と八ヶ岳のような山、一五回して二〇回程
山行しました。ニューヨーク州北部のADIR-
RON DAUCL MTS は奥多摩を関東平野
に広げたような群山で、もう大部前のことで
すがそこで山旅ガイドのようなことをして一
夏すごしました。ニューヨーク市に近いC-1

語を長い間使わない故です。どうか大目にみてやつて下さい。針葉樹会の皆様によろしく。迄フル勤務の主賓並びに山崎（拡）、半日勤務の伊藤（恙）、松下、それに終日不勤務の追記 会費はいくらですか。何円が一ドル エコノミックなんとやらで、土曜日の午後

ですか。山岳部はアメリカから山具
がいりますか。軽良の良い山具がい
てに集合、天然クーラーの利いた部屋から、
ろいろあり値段もそう高くあります
久保と有志五名、七月十四日夕刻日原ヒュツ
ん。何年も会費を滞納したので、そ
過しました。

ATSKIL MTS も矢張奥多摩級、もう一〇年前になるかもしません、その時ニュー

の分位の注文は僕が払ひます。近い
うちにRECREATIONAL EQUI-
PMENTをつめてまたたく間に唐松谷入口へ。

ミーク市に滞在中の市川君と一緒に一回山行
したのを覚えていてます。一九六三年一月か
と思ひますが、ハツキリしません。

PIMENT といふ山屋の値段表を送ります。

唐松谷は原生林が密生してひんやりと普
むし、倒木の朽ち果れた間を人の往来の少い
細径が、吾々のペースにふさわしく穏やかに

針葉樹会の人がアメリカに来て山へ行くひ
まがあつたらどうか連絡して下さい。ユタの
山へはいつでも喜んで同行します。来冬はク

林茂雄君歎迎山行

リスマスと年末休暇を利用してMOTTEK

STONE 国立公園をスキー横断するつもりです。滞米会員で一緒に行きたい人があつたら

四日
一五日

松下順吉

一二月初めまでに連絡して下さい。スキー技術はあまりいりませんが、荷が重く距離が長

前后七ヶ年に亘る不自由な（？）大阪・名古屋での勤務から、このたび東京支店へ戻つ

する単調極まる二時間半の暑い屋根下り、「ピール、ピール」を唱えながら奥多摩湖畔迄

三時頃、咽喉の楽しみにありつくことが出来ました。

(松下記)

山本健、勝田有、柴崎、新井、沢木、宇田川、市川、景山、中島寛、三股、石、大、多田、高橋信、村上、竹中、中橋、小島、

小野、原、佐藤久、金成、加藤、俵、田沼

翁樹会

三森茂充

藤原、以上七一名

昭和四十八年五月十七日(木)

於如水会館南北日本間

出席者・村尾、松木、増山、中島、柿原、

(出席)望月達、岩崎、吉沢一、村尾、松木、近藤、冠木、増山、鈴木英、柿原、榎本、

望月、佐々木、榎本、岩崎、日江

日江井、佐野、山田亮、久保、原田、松下、桶口、高崎治、中村幸、大賀、宮本、倉知、

井、宮城、山田、久保、原田、高

野、山崎、大島(小林、松下幹事)三森、石田、岡田、中村雅、戸川、藤巻、

以上十九名

荒れ模様の空もどうにか降りにはならず、幹事としてはやゝ気をもまされた晚でした。

委任状

会費改訂は次の通りとなつた。
卒業後 十年まで 三千円

高木、高橋要、金田一、河相、宇佐美、久
保田、手塚、吉沢松、小川竹、清水、堀岡、

岡田謙、豊田、中島孚、黒田、松浦、小林
重、佐々木、船本、大塚、宮城恭、深谷、

樺渕、佐藤政、林戸、高野、鈴木肇、間々

田、中林、佐耆、野尻、山崎、大島、島影、
伊藤恙、笠原、小川宣、小泉、南昌、高橋

尚、渡辺幸、吉田、松尾、石和田、鈴木、

当日会費 五七、〇〇〇円

如れ会館支払△五六、〇〇〇円

通信費 △二、一四〇円

次会繰越金 一八、八二五円

四八年度総会報告

昭和四八年六月二七日(水)

場所 如水会館 南北日本間

(学生)、前神、兵藤、加藤、増井、松

(学生)、前神、兵藤、加藤、増井、松
田、佐藤、若林、都倉、計八名

議題

1.開会あいさつ(望月会長)

2.四七年度決算報告及び四八年度予算(別¹)

掲)一 承認

会費改訂は次の通りとなつた。

卒業後 十年まで 三千円

高木、高橋要、金田一、河相、宇佐美、久
保田、手塚、吉沢松、小川竹、清水、堀岡、

岡田謙、豊田、中島孚、黒田、松浦、小林
重、佐々木、船本、大塚、宮城恭、深谷、

樺渕、佐藤政、林戸、高野、鈴木肇、間々

田、中林、佐耆、野尻、山崎、大島、島影、
伊藤恙、笠原、小川宣、小泉、南昌、高橋
尚、渡辺幸、吉田、松尾、石和田、鈴木、

4.評議員の一部改選

現評議員横山院一氏の海外勤務に伴ない
甘利仁朗氏を選出した。現評議員は次の
通り。(任期はあと一年)

望月達夫（会長）

岩崎利一（副会長）

松木謙三（昭三～十五年代表）

手塚晴雄（同右）

中島 孜（同右）

日江井正己（昭十六年～三十年代表）

松下順吉（同右）

山崎 拓（同右）

伊藤慈生（同右）

甘利仁朗（昭三一～四八年代代表）

中村保（同右）

倉知敬（同右、評議員会議長）

竹中彰（同右）

高崎俊平（同右）

5.幹事任期（一年）満了に伴う改選

代表幹事、高崎治郎（留任）

総務 中村雅明（現学生担当）

〃 加藤正己（〃）

会計 石田信隆（留任）

会報 岡田健志（〃）

山行 大賀二郎（留任）

三森茂充（現総務担当）

学生 俵 昭（留任）
金子晴彦（新任）

年度予算 一 承認。
以上

なお左記の顧問の各氏は引続き任に当られる。

会計 原田豊、伊藤慈生、吉田義則、上原

利夫、渡辺嘉佑

会報 村尾金二

山行 山田亮三

学生 中島寛

6.会費滞納者の扱いについて

会費値上げの審議に並行して徴収率の引

上げの方法について討議がなされた。会

則では「二年間の会費滞納者は会員の資

格を失う」となっているが、先ず払い易く

くするよう、郵便局の口座などを新設し、

振込用紙を送付するなど便宜をはかるよ

う対策をとることとした。そのうえ、明

らかに退会希望の人や幽靈会員などの扱

いと決定する。また海外会員にも会費納

入の依頼を出すなど、積極的な会費増収

策をはかることとした。

7.一橋山岳部四七年度決算報告及び四八

中村雅明 ▷181 三鷹市下連雀二一四一十
二

会務報告

昭和48年3月
昭和48年7月

三森茂充

評議員会 6月21日(水) 如水会館

出席者 望月、中島、(学) 日江井、松下、

倉知、竹中、(評議員)

高崎(治)、三森、石田、岡田

中村 (幹事)

学生 二名

議題 1. 四十八年度総会提案事項の打合

せ

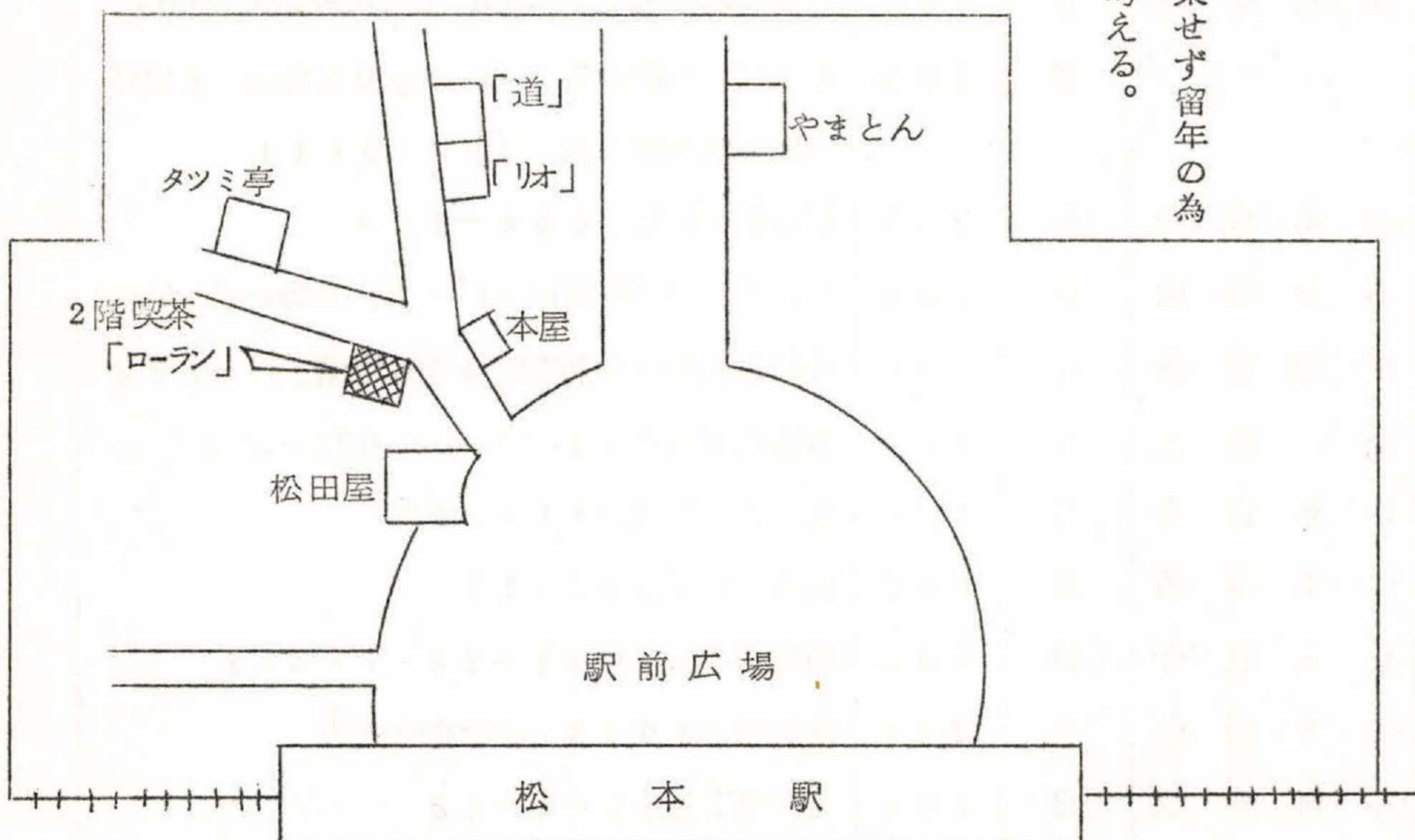
とくに会計幹事から、円滑な、
会運営に支障を来る財務状態が
訴えられ、会費値上げを伴う、今
年度予算について種々の意見が
出た。

2. 新入会員加入の件

上田 伸 (日本鉱業(株)勤務)
藤巻 悟 (東亞燃料(株)勤務)
井草長雄

以上三名の加入承認。尚、西

田研志君は卒業せず留年の為
今年は部員と考える。



住所変更

卒業年度	氏名	自・勤	▼	新住所又は勤務先
昭 17	細野直令	自	154	世田谷区池尻4-26-10
昭 19	小林茂雄	自	167	杉並区本天沼2-13-18
昭 21	間々田良雄	自	113	文京区本郷5-17-4
		勤	105	港区西新橋1-2-9 三井物産株本店経理部
昭 22	伯耆豊次	自	659	神戸市東灘区岡本7-14-15-21
昭 29	高橋尚好	自	309-22	八戸市多賀台1-15 三菱製紙社宅A-1-136
		勤	031	八戸市大字河原木字青森谷地 三菱製紙株 八戸工場業務部 会計課 0178-28-2211
昭 30	鹿俣謙一	自	228	相模原市相模台5-12 ハイツD-305 0427-43-9718
昭 33	加地幸雄	勤		DEPARTMENT OF PHILOSOPHY 338 ORSON SPENCER HALL THE UN- IVER SITY OF UTAH SALT LAKE CITY, UTAH 84112, U.S.A.
昭 33	西海隼雄	自	152	目黒区碑文谷1-2-10 シーアイマンション102
		勤	103	中央区日本橋本町2-4 伊藤忠商事株 船舶第 一部 船舶第二課 662-5111
昭 33	茂木俊明	自	239	横須賀市野比1684-108
昭 31	吉田義則	自	342	北葛飾郡吉川町吉川917-24 0489-82-6031
昭 35	宮城賢三	自	654	神戸市須磨区須磨寺町4-5-8 台糖アパート 62
昭 36	石弘光	自	171	豊島区雑司ヶ谷1-36-12 971-0536
昭 36	小林正直	自	190	立川市柏町団地11-207
昭 36	山本尚禎	自	380	長野市梅園団地2-21
昭 39	村上泰介	自	730	広島市牛田早稻田1-24-7-311
昭 41	山本溢弘	自	247	鎌倉市台1599 小野田専藏方
昭 43	中村雅明	自	181	三鷹市下連雀2-4-12
昭 43	加藤正巳	勤	210	川崎市川崎区駅前本町5-1 三井信託銀行川崎支店
昭 45	宮武幸久	自	980	仙台市台原2-12-14-401

針葉樹会昭和47年度会計報告並びに昭和48年度予算

		昭和47年度会計報告 (S47.6~48.5)		昭和48年度予算 (S48.6~49.5)	
		備 考		備 考	
收	前期繰越会費	61,717		40,849	
		297,500		520,000	
入	その他の	197,012	金田氏より10,000 積立金より繰入 10,000 遭難基金より繰入 50,000 ほか	21,000	仮払金回収
	合 計	556,229		581,849	
支	会報発行費	297,870	印刷費 33号 45,000	283,000	年4回発行
	山岳部補助	150,000	34号 102,000 35号 35,000 36号 65,000	150,000	
	通 信 費	22,870	郵送費 50,870	30,000	
出	印 刷 費	10,800		10,000	
	事 務 費	5,000	学生大阪集金	20,000	集金費用
	雜 費	7,840	アルバイト謝礼、タクシーデ バッヂ代立替14コ分	20,000	
	仮 払 金	21,000		0	
	合 計	515,380		513,000	
	期 繰 越	40,849		68,849	

遭難対策基金 503,140 . -

一橋大学山岳部昭和47年度会計報告並びに昭和48年度予算

		昭和47年度会計報告 (S47年6月~S48年5月)		昭和48年度予算 (S48年6月~S49年5月)	
		備 考		備 考	
収入	針葉樹会より	150,000		150,000	
	部 費	12,000		22,000	2,000円×11人
	体育会補助金	0	手続きミスのため	30,000	
	前年度繰越金	10,795		3,130	
合 計		172,795		205,130	
支出	装 備 費	99,435	冬用6人テント 65,000ほか	129,500	{ ラジオ・ヘルメット・ホエ ブス・カラビナほか
	庶 業 費	42,225	山岳保険補助 13,750	35,000	{ 団体会費・印刷費・ 通信費ほか
	図 書 費	14,010	ガラス修理 4,450ほか	20,000	
	医 療 費	7,520		10,000	
	雑 費	6,475		10,630	
合 計		169,665		205,130	
期 繰 越		3,130		0	

遭難対策基金 141,965.-

編集後記

会報復刊第三十七号をお届けします。遅くなりました。

× × × × ×

総会で会費値上げが承認されました。会費納入率が悪いことが最大の原因です。率が低いから値上げをしてという安易な気持は毛頭なく、納入率の向上にも一層工夫をこらしていこうという評議員会の一致した考え方でした。

× × × × ×

夏山の計画はどうなっていますか。旅先からでも、山の上からでも何処からでも結構ですからお便りを下さい。

× × × × ×

来号は十月に出す予定です。秋にふさわしい文章を多数よせられることを期待しています。

(岡田健志)

針葉樹会報 復刊第 37 号

発行日 1973年8月

発行人 針葉樹会 代表 望月 達夫

編集人 千代田丸ノ内1-3-2 住友化学工業㈱

東京ポリエチレン部 岡田 健志

印刷所 美豊堂

